『方便から真実へ　浄土真宗』より抜粋

115　六種に震動する

解説＝南無阿弥陀仏は十劫の昔に機法一体、仏凡一体に成就してあるから、助かっていると思われたら、大間違いでありますよ。助かっているのなら、今さら信心も安心もいらない、十劫の昔に助かっているも、いないも、詮索することも何にもいらないではありませんか。宗教も信仰も何にも必要なし、助かっていることを知らなかった、知るも知らぬも口にする必要がないではありませんか。

南無は機の方、阿弥陀仏は法の方、機法一体に成就してある、それは南無したものが南無阿弥陀仏と一体になれるという証明ができたのであって、私が助かっているのではありませんよ。南無しましたか、求道しましたか、安心しましたか、満足しましたか。善導さまは東

の方から群賊悪獣に追い立てられて、忽ちに見る大河ありの三定死の境地に立ったとき、汝一心正念にして直ちに来たれ、我よく汝を護らんの声なき勅命に信順したときが、南無と仰せられたのですが、それを善導さまにさして、素直に聞いていると話を聞いて合点したのを信仰と思っているのは、自分の信仰ではありませんよ。話ですから痛くも痒くもない、ただ感じただけですよ。それで生死の大海が乗り切れると思っているのですか。三定死とは、自分の機に呆れて地団太を踏んでいるのではありませんか。それが勅命一つに飛び上がったのが二種深心ではありませんか。法の話ばかり聞かして、それでも堕ちるのだと聞かして、それで二種深心が徹底すると思っておられるのでしょうか。実地の体験のない人は、学問はしても実地の体験は零だと思います。

二種深心が徹底したときが、法が機に生き　機が法に生きた、法の絶対と機の絶対とが一体になったのを、機法一体、仏凡一体、仏智満入、即得往生というのではありませんか。

これを机上の空論で片付けておいでになるのは、二種深心の真似をしているだけですから摂取されてはいません。

なぜ自分の機を見るのがいけないのですか。その機が次の世界にでていくのですよ。あなたはまだ、自分を素直な柄と思うて自惚れているのですか。三千世界をさがしても素直な柄は一人もいませんよ。三世の諸仏に愛想をつかされ、第十八願から除かれている逆謗の屍ということがまだわからないのですか。

あなたは法の尊さを聞かしてもらって有難がっている、第二十願の桁ですよ。どうもはっきりせん、どうも安心ができないと進むのが、自力が引っ張ってくれているのですよ。ひょっと堕ちはせぬかと思うのが疑いですよ。第十八願から除くといわれたのは、阿闍世と提婆と思っていたが、私が除かれていたのかと驚いたときでなければ、ほんとうに堕ちるはわからないのです。本当に堕ちたときでなければ、本当に助かったという体験はないのです。若不

生者の念力に貫かれたときに、至心信楽己を忘れた大満足、大慶喜の天地が恵まれるのです。法を仰げばいよいよ高く、機を見ればいよいよ深い、法を見てよし、機を見てよし、これでこそ無二の懺悔となり、無上の歓喜となるから、嬉し恥ずかしの生活になるのです。無二の懺悔が俗諦門と変わり、無上の歓喜が真諦門と変わるから、浄土真宗を二諦相資の宗旨とするのであります。

この機に用事がないというのは馬鹿の骨頂であります。この機がいなければ、五兆の願行は無用の長物です。この機一つを生かさんがために、十方法界が揺いでいるのですから、私が開発されたとき、三千世界が六種に震動するのであります。

万歳万歳万々歳、ふたたび迷わぬ身にさしていただいたこの大慶喜、身命を賭して常行大悲のお手伝いをさして頂きましょう。